# 氷竜アニオリ　スピンオフ

タイキック新

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬもう一人の滅竜魔導士「氷竜」より、アニオリのみを書いたスピンオフ作品です。こちらでは小説のオリジナルは書くつもりはありません。

オリ主　オリキャラありの為、この作品を読むならＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬもう一人の滅竜魔導士「氷竜」を読んでから読むことをオススメいたします。

氷竜で章をいくつか書き終えたらこちらも少しずつ書いていく予定です。

メインのお話しはこちらです。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２２３３０９／

# 目　次

鉄の森編後
村とキノコとモンスター ―――― 1
ガルナ島編後
オレがオマエでオマエがオレで ―――― 23

# 鉄の森編後
# 村とキノコとモンスター

リート達が呪歌を倒してから約2日、現在リート達はマグノリアに歩いて帰ろうとしていた。
しかし、
リート達は熟練のハンターですら、一度迷ったら出られないと言われる蜘蛛の巣谷（くものすだに）に迷い混んでいた。
「あー!!もう!!ちょっとハッピーあんたまた迷ったでしょ!!歩いても歩いてもマグノリアの街に着かないじゃないの!!この方向音痴ねこ!!」
「またって失礼しちゃうな、こないだは迷わなかったよ。今回が初めてなんだ」
「どの道、お前の言うとおりに歩いて来て迷ってんだから一緒じゃねぇか…」
はぁ～
歩き疲れたナツ達は、同時にため息をつく。
「腹減ったなぁ～」
「言うな、余計腹減るだろーが」
「減ったもんは減ったんだよ、あぁ?」
「だから減った減った言うんじゃねぇ!!」
「お止めなさいな、ナツ、グレイ、余計な体力の消耗ですわよ」
ぐぅ～
「……」
「お前も腹減ってんじゃねぇか」
「お黙りなさい」
「確かに…減ったのぉ～」
リート達と共にマグノリアへ帰ろうとしていたマカロフも、腹ペコ

のようだった。
「だからぁー!!」
「よせ」
ぐぅ～
争っている二人を、エルザが止めようとするが、その前にエルザの腹が鳴る。
「「「「……」」」」
「今ぐぅ～って鳴ったぞ、ぐぅ～って」
「鳴ってない、空耳だ」
「言い訳が苦しすぎるぞエルザ」

「あーーっ！」
リート達がエルザに意識を向けていると、ハッピーが崖下を見て、目を輝かせながら騒ぎ始めた。
「？どうしたハッピー」
「何騒いでんだよ」
「ナツ！あれ見て!!」
「？」
ハッピーが指差す方を見ると、そこには羽の生えた魚が何匹も飛んでいた。
アイ　キャン　フラーイ
ユー　キャン　フラーイ
「なんつー鳴き声の魚だ…」
「なんか気持ち悪いですわ」

「幻の珍味!!羽魚(はねさかな)だ!!あれ滅茶苦茶美味しいんだ」
「美味しいって…食ったことあんのか？ハッピー」
「ありません」
「ねぇのかよ!!」

「幻の珍味…」

「羽魚…」
「旨そうだな!!」
「とりあえず、食えるってんなら取っ捕まえて食ってみるか」
「でかしたハッピー…よく見つけたのぉ」
　全員あまりにも腹が減っていたのか、マカロフに至っては涙さえ流して腹を鳴らせていた。
「皆お腹空きすぎです…」
　ぐぅ～
　ツッコミを入れるルーシィだが、そのルーシィの腹もなっていた。
「お前もな」
「あい…」

「釣竿なら用意しておきましたわ！」
　ラリカは、即席の簡易釣竿を作って用意していた。
「手際良すぎねぇ!?」

「よーし！釣るぞー!!」
　それからしばらく…
　リート達は釣糸を垂らしてジッと待ち続けているが、一向に釣れる気配がなかった。
「くっそー、こいつら釣れそうで釣れねぇなぁ」
「オイラ頑張るぞぉ!!」
「なんかあんまり美味しそうに見えないんだけど」
「黙って釣れ、この際食えればいい」
「もはや味とか気にしてられねぇんだな…」
「私もさすがにお腹が空いてますの、少しでも足しになるならもう何でもいいですわ」

「羽魚食べたいぞぉ!!美味しいぞぉ!!幻の珍味だぞぉ!!」
　……
「飽きてきました」

1番気合いの入っていたハッピーが、1番最初に釣りをやめた。
「意志よわ!!」
「さっきの気合いはどこ行った…」
「だって全然釣れないんだもん」
「お腹空いてるんでしょ？だったら頑張ろうよ、諦めないで、ね？」
ルーシィは、ハッピーを励まそうと言葉をかける。
「ルーシィのいじわるぅ～!!」
「えーー!?励ましたんですけどぉ!!!」

結局、羽魚は二匹だけしか釣れなかった。
「難しいのねぇ」
「結局二匹だけか」
ボゥ！
ナツは一瞬で、二匹の羽魚を焼き上げた。
「ハッピーとラリカ食えよ」
「でも、オイラとラリカだけじゃ」
「そうですわよ」
ナツの好意をハッピーとラリカは断ろうとするが、グレイやリート達が二人に薦める。
「そんなのちょびっとずつ別けて食ったら余計腹が減るわ」
「人の好意は素直に受け取っておけって、な？」
「遠慮するな、食え食え」

「そう？」
「では、ありがたく頂きますわ」
ハッピーとラリカは、嬉しそうに羽魚にかぶりつく。
ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～
ハッピー達の後ろでは全員腹を鳴らせて、羽魚を食べるところを見ていた。
はむはむはむ
「こんな魚を美味しそうに食べられるなんて、あんた達本当に幸せね

…」
「マズゥ!!!」
「不味いんかい!!!」
結局、羽魚釣りは諦め、全員はまたマグノリアの街に向け歩きだした。
「それにしても…」
「腹が…」
「減ったのぉ」
すると、リート達の歩く行き先に1つの村が見えてきた。
「お?」
「村だ」
「家だ!」
「だったら食べ物があるかも!!」
「食いもんだぁーー!!!」
ナツ達は、全速力で村へと入って行った。
リート一人を残して…
「はぁ…」
そして、街の中心まで走ったナツ達は、あることに気がつく。
「誰もいねぇぞ」
「なんか、静かな村ね」
「昼寝でもしてんじゃねぇのか?」
「村中の人達が一斉になんてありえませんわよ」
「おーい!!誰かいねぇかぁ?」
「お腹減り減りですぅ!!誰か食べ物をくださーい!!」
「そこの猫、露骨すぎだから」
「けど、この村に人がいねぇのは間違いないみてぇだぜ?」
歩いてナツ達に追い付いたリートは、辺りを見渡しながらそう言った。
「人の声どころか、物音1つ、さっきから聞こえてこねぇ、不気味なくらい静かすぎるからな」
「村中酔っ払って寝とるんじゃないかのぉ?」

「それは妖精の尻尾（フェアリーテイル）だけですわ」
「ハハーッ！そうとも言うのぉ!!」
「いびき1つ聞こえてこねぇんだ、それもあり得ねぇな」
「ええーい面倒くせぇ!!力ずくでも何か食ってやる!!」
「おい、そりゃちょっとした強盗だろ」
「って、おまえもその気だろーが!!」
ナツとグレイは、小走りで建物に向かっていく。
「どっちもどっちじゃねぇか…」
1つの建物にたどり着いたナツとグレイは、ゆっくりとドアを開いた。
「ん？」
そこには、まだ冷めきっていないスープと、焼き上がったパンが机の上においてあった。
「やっぱ誰もいねぇな」
「とにかく食い物だ」
ナツは、机の上に置かれたパンに手を伸ばす。
「よっしゃ！まだ食える。いっただきまー」
「待て」
「んあ？」
ナツがパンを口に運ぼうとした時、エルザがそれを止めた。
「なんだよ？」
「様子がおかしい」
「あぁ、乾燥しきってないパンに、まだ温かいスープ…ついさっきまで誰かがここで食事しようとしていた感じだ。この家に住んでたやつは何処に行った？」
「知るかよ、とりあえず食おうぜハッピー！」
「あい！」
ナツがもう一度、パンを食べようとする。
「待て!!」
「は、はい！」

しかし、エルザが睨み付けて止めたことで、ナツも食べようとするのをやめた。
「先に村の様子を調べる必要がある」
「まぁ、そうだな、現状だと村の状態が怪しすぎる。下手に村の物に触らねぇ方がいいかもしれねぇ」
「そういうことだ、今まで我慢してたんだ。もう少し我慢」
ぐぅ～
エルザの腹が鳴ったことですべてが台無しになる。
「お前もちょっとは腹の虫を鳴らすのやめてくれ…」
「エルザ、お腹鳴りすぎ…」
「説得力ゼロじゃな」
「ナツ達はキノコか何かを探してこい、村の食べ物にはさわるな！その間に私とリートとマスターは村の中を調べる」
ナツは、食べ物にさわるのをやめて外に向かう。
「あ～ぁ、わかったよ。行くぞハッピー」
「あい！」
（なぜキノコ？）
そして、ナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーは村の近くの森の中にキノコ採集にきた。
「せっかく旨そうな食い物があったのによぉ、キノコなんかじゃ腹膨れねぇよ」
ナツ達は足下にキノコが生えていることに気付く。
「お？」
「キノコだ」
「あったー！旨そぉ～!!」
（なぜキノコ？）
「オイラ知ってるよ」
「なに？」
ハッピーが何かを知ってるようで、話し出す。
「ナツが笑い茸みたいな毒キノコを食べちゃうんだ。お約束なんだ」
至ってどうでもいい情報だった…

「何言ってんだハッピー、さすがにそんなベタな事…ふぃねぇよ」
とナツは、明らかな毒キノコっぽいキノコを食べながら話す。
その頃リート達は、村の様子を調べ続けていた。
「大丈夫か?ラリカ」
「さすがにお腹が空きすぎて、動けませんわ…リートちょっと頭に乗せてくださいまし」
「ん」
ラリカを抱えたリートは、そのまま自分の頭の上に優しくのせる。
ガチャ
そして、リートが先程とは違う家の扉を開くと、やはり食事をしようとしていたのか、食べ物が置かれた机のみが視界に入った。
(ここも同じか…)
ジュルリ
「ん?」
リートの頭の上から、ラリカがヨダレを垂らしており、リートの頭にかかっていた。
「うぉぉぉい!!?ヨダレ!!頭!!!」
「ハッ!…し…失礼いたしましたわ」
「…ったく…ん?」
よく見ると、部屋の奥に木箱が置かれており、その中から魔道具がいくつか見えていた。
「魔道具?」
ジュルリ
「だからヨダレ!!!」
場所は戻ってナツ達キノコ採集チームは、なんだかんだと文句をいいながらも、かなりの量のキノコを集めて食べていた。
「たかがキノコでも、こんだけ食えば腹が膨れそうだな」
「これは、フリなんだ」
ムシャムシャ
「いいから早く採れ」
「ア…アハハハ…」

「ん!?んぐぐぐぐ!!」
「ナツ!?大丈夫?!!」
キノコを食べていたナツが突然苦しみだし、ルーシィが心配する。
「ホラ、キター!!」
その様子を、ハッピーはワクワクしながら見ていた。
ポン！
「ビックリしたぁ！」
「こっちもビックリー!!」
ナツが苦しまなくなったかと思うと、突然ナツの頭からキノコが生えてきた。
「笑い茸じゃないのか…はぁ～」
笑い茸と思っていたハッピーは、異常な程がっかりする。
「落ち込むとこなの？」
「なーに騒いでんだよ？」
ルーシィ達の騒ぎを気にしてきたグレイだが、グレイもナツと同じく頭からキノコが生えていた。
「二人とも…頭、頭」
「ん？」
ナツとグレイが顔を見合わせると、お互いの頭にキノコが生えていることに気がつく。
「「ぶぅあっはっはっはっ!!」」
「なんだテメーそのキノコ!!」
「テメーこそ!!ふざけたキノコ乗っけやがって」
二人はお互いに、頭を生えたキノコを指差しバカにする。
「なんで自分の心配はしなーい？」
「おい、タレ目、今笑いやがったな？」
「テメーもアホ面でニヤついたろーがよぉ」
お互いにバカにしあってた二人が、いつものごとく喧嘩し始めた。
「んだとコラァ!!」
「やんのか!!あぁ!!?」
「頭にキノコ付けて喧嘩しなーい!!」

そして、あらかた村を調べ尽くしたリート達は一度村の中心で合流する。
「どうでした？」
「やはり誰もおらん」
「こっちもだ、どこもかしこも、突然人が消えたように…誰もいなくなってる」
「そうか…それはそうと、なぜお前の顔はそんなに濡れている？」
エルザは、リートの顔を見て不思議そうに問う。
「ラリカのヨダレでベタベタになったから顔を洗ってた…」
「そ…そうか…ん？」
エルザは、リートの足下にある村の地面にできた一本の線が気になった。
「この線は…なんだ？」
その線は、地面の石の隙間を真っ直ぐに続いて伸びていた。
「単なる石の隙間じゃありませんね」
「あぁ、どー見ても明らかに意図的に掘られてんな」

「はぁ、はぁ」
「はぁ…ふぅ…」
ナツとグレイは、あの後も、ずっと喧嘩を続けていた。
「ちょっとーバカっぽすぎるよぉ」
「ルーシィ!!特大の見つけたよ!!」
「ホント!?でもそれ何か怪しくない？」
「どれどれぇ？おぉ～デケェ」
「これ一個で2日はもちそうだな」
ハッピーの持っているキノコに、ナツとグレイは大喜びだった。
「あんた達は頭のキノコどうにかしたら？」
パクっ
ハッピーは、なんの躊躇いもなくキノコにかぶりついた。
「ちょっとハッピー!!ダメじゃない!!毒かもしれないのよ!!ぺっしな

さいぺっ」
「でも美味しいよ？」
「!?んぐぅぅぅ!!」
キノコを食べたハッピーは、苦しみだした。
「「!?」」
ポン！
「きゃあああぁ!!」
ついに、ハッピーの頭からもキノコが生えてしまった。
「結局…どれ食ってもこーなんじゃねぇか？」
「村の連中、どーやって食ってたんだ？」
「そりゃあ、みんなこーだろうよ！」
「村の名前はきっと、キノコ村だな!!」
「アッハッハッハ！」
「……」
ハッピーは、自分の頭に生えたキノコをジッと見る。
「2度目は寒いよぉ!!」
「そー言うもんだいじゃないでしょ!?!!」
「ちょっと待って！」
ルーシィはナツの頭を見て、驚く。
「あんたのキノコ、成長してない!?」
「!?」
「ずるいよぉナツばっかり美味しいとこ～!!」

そして、村の地面に変な線を見つけたエルザ達は、色々と線をたどって調べていた。
「ここには別の線が…」
「う～む」
「明らかに意図的なのは間違いねぇな」
「早く調べて何か食べ物を探しましょうですわ…」
「腹減ってんのはわかるけど、そればっかだな…」
ぐぎゃあぁぁぁ…

村のどこかから、不気味な鳴き声が聞こえてきた。
「なんだ」
村のどこかから聞こえる鳴き声は、ナツ達の耳にも届いていた。
「なんだ？」
スポン
鳴き声が聞こえると同時に、ナツ達の頭についたキノコもきれいにとれた。
「あー！キノコ消えたぁ！」
「ハッピー…あんただけ付いてるわよ」
「うえーーー!?」
「リート！エルザ！じっちゃん!!」
ナツ達は、急いで村へと戻っていった。

そして、村の中で線を調べていたリート達の足下が光だす。
「ん？」

「リート!!」
ナツ達もリート達と合流し、地面が光っている事に気付く。
そして、地面が光った後、周りの建物も光り、さらには歪んで見えるようになってきた。
「なんだこりゃ」
「どど…どーゆーこと!?」
「オイラ、家が動くのなんて初めて見たよ」
「リート…これ、何かマズくありませんこと？」
「あぁ…お前ら、気をつけろよ!!」
「これは…」
「やるぜ、じぃさん」
グレイは、魔力を込め始める。
「待てぇい！」
「な…なんでだよ!?」
「高いところへ上るんじゃ、確かめたいことがある」

マカロフは高いところへと走り出す。
「みんな来い、離れるなよ！」
それに続いて、全員がマカロフを追いかけていった。
そして、崖の上に登ったマカロフ達が見たのは、村が蛇のような巨大なモンスターへと変わっていく光景だった。
ぐぎゃあああ！
がぁぁぁ！
「うっひゃぁぁ！訳わかんねぇぞこれぇ」

「なんとなく予想はしてたが…やっぱりあの線は、魔方陣」
「「え⁉」」
リートは、先程の線を魔方陣と見破っていた。
「あぁ…お前が見つけたあのいくつもの線は、魔方陣の一部じゃ。そしてこの魔方陣は、かつて禁止された封印魔法アライブを発動させる為のものじゃ」
「アライブ？」
「あれを見ぃ」
マカロフは、モンスターを指差して説明する。
「一目瞭然、本来生命のない物を生物化して動かす魔法じゃ。村の連中は、その禁断の魔法を発動させ、逆に化け物達の餌食になった」
「でも、どーしてそんな危ないことを…」
「多分だけどよ、ここは…」
「闇ギルドの村だ」
リートが言い出すよりも早く、エルザが闇ギルドの村と言い出した。
「何⁉」
「この村の中で魔道具をいくつも見つけた。当然、表の世界では禁止されてるような魔道具ばっかりな…」
「私もだ、いずれも、まともな魔法の物ではなかった」
「闇ギルドの事じゃ、どーせよからぬ企みでもして、そのせいで自滅したんじゃろう」

「じゃが!!これぞ不幸中の幸い」
マカロフの言葉がよくわかっていないリートは、首を傾げる。
「不幸中の…幸い？」
「やつらは生き物じゃと言うたハズじゃ…大抵の生き物は…」
「…まさか？……（嫌な予感）」
リートはマカロフの言いたいことを察して、顔色を悪くする。
「食える!!」
「やっぱりかぁ!!」
ぐぅ～!!
リートとルーシィ以外は、完全にやる気だった。
「っしゃ～!!食うかぁ!!」
「わーい!!ご飯の時間だぁ!!」
「この際、味がどーのなんて言ってられねぇな!!」
「マジで!?やるの!?本気か!?」

「ふっ！」
真っ先に飛び出したのは、まさかのエルザだった。
「アイツが1番やる気かよ!!?」
「エルザそんなに腹空きーー!!?」
それに続いて、ナツ、グレイ、ハッピーも後に続いて崖から降りていった。
「ほら、リート!!あなたもやるんですわよ!!」
「いや、マジで!?あれ食うの!?」
「もう我慢の限界ですわ!!」
「お前、羽魚食ったじゃん!!」
「足りるわけありませんわ!!!」
「いやぁぁぁ!!!」
リートもラリカに連れて行かれて、崖から降りていった。
「ちょっ…ちょっとぉ!!」
「ワシの分も頼んだぞぉ!!」
ナツ、リート、グレイ、エルザはそれぞれモンスターの前に降り立

つ。
「おい、テメェら、オレを誰だか知ってるか？妖精の尻尾1の炎の料理人だぁ!!!」
ナツは、拳に炎を纏ってモンスターの首を殴り付ける。
「火竜の鉄拳!!」
ドゴォ!!
ぐぎゃあぁぁ!!
「まずは、よーく火を通してぇ」
「そしてぇ」
ナツはこれでもかとモンスターを殴り付けた後、崖を崩してモンスターを下敷きにする。
「蓋をして蒸す、しばし待つ」

そして、リートもラリカに半強制で戦わさせられていた。
「ほらリート、やっておしまいなさいな！やらないと後で拷問器具の実験台にいたしますわよ!!」
「わかった！わかったよ！やりゃいいんだろ!!やりゃあ」
ぐぅ～
「ブフッ、やっぱりあなたもお腹すいてるじゃありませんの」
「うっせぇ…」
リートはモンスターの前に立つと、手を手刀の形に変えて氷を纏う。
「このまま凍らせたら、さすがにオレは食えねぇからな…やりたくねぇが刺身でいくか」
スパパパパ！
「氷竜の陣円!!」
リートはモンスターをスライスして地面に氷を張り皿を模し、一枚ずつ空中から落としていく。
「よっと、こんなもんかな」
「さすがですわ！」

そして、グレイも、モンスター調理にとりかかる。
「いきなりデザートってのもなんだが、まぁしょーがねぇ」
モンスターは、グレイの姿を見つけて襲いかかろうとする。
「アイス・メイク…魚網（フィッシュネット）!!」
モンスターの攻撃がグレイに届く前に、グレイの攻撃でモンスターが氷付けにされた。
「シャーベット完成！頂きます」

ハッピーは、椅子の形をしたモンスターと格闘していた。
「あい！あい！羽魚と椅子と、どっちがマズいか微妙だけど！」

でぇりゃあ！
「うわぁ！」
椅子の攻撃をかわしたハッピーは、椅子の上に乗ってしまい、降りることができなくなってしまった。
そして、エルザもモンスターと戦おうとしていた。
「エルザ！」
ルーシィはエルザの下にやってくると、少し心配そうにエルザに声をかける。
「下がっていろ、調理の時間だ」
「ちょ…調理って」
「換装!!」
エルザは鎧から、エプロン姿へと換装し、両手に巨大な出刃包丁、その周りにも巨大な包丁など調理器具を浮かべて構えていた。
そして、一瞬でモンスターと細切れにして、一口サイズまで切り裂いた。
「げっ!?」
「一本の長さは約５ｃｍ、幅は４㎜各に刻むのがコツだ」
「そんなこだわりまで!?っていうかエルザ…その格好…」
崖の上では、マカロフが腹を空かせて待っていた。

「腹が減ったのぉまだかのぉ？」

そして、それぞれ調理が終わり、モンスターの味見をし始める。

ナツも

「いっただきまーす！」

リートとラリカも

「リート、お先に食べていいですわよ？」

「あからさまな毒味役宣言!!?」

「分かったよ…」

ムシャッ

リートはスライスされたモノを食べると、動かなくなり黙ってしまった。

「リート？」

「……」

「もう！いったいどうしたって言うんですの？」

ラリカもスライスされたモノを取り自分で直接食べてみた。

エルザとルーシィも

「ルーシィ、先に食べてみろ」

「嫌です!!!」

「仕方ないな」

エルザは細切れになったモンスターの一部を取り、ルーシィに手渡す。

「それ違うでしょ！なんで先にアタシに食べさせようとする!!?」

「では…」

エルザは、モンスターの一部を黙って食べた。

カリっ

「ど…どんな味？」

ルーシィが興味を示して訪ねるとエルザは黙ってもう一本取り、ルーシィに渡す。

「うえっ…じゃ…じゃあ……」

ルーシィはエルザから渡されたモノを受けとると、恐る恐る食べて

みる。

グレイも

「さてと、食ってみるかな」

グレイは凍らせたらモノを取って、食べてみた

「「「マズゥゥゥゥ!!!!!!」」」

「ん？」

ナツ達は、マカロフの下に急いで戻った。

「なんだあれ!!じっちゃんあんなの食えねぇぞ!!」

「不味いにも程があるぞ!!」

「だから食ったこともないやつを食うのは嫌だったんだよ!!!」

「あんな物！食べ物とは認めませんわ!!!」

「あぁ、食べられたモノじゃないな」

「アタシに食べさせてから言わないで下さい!!!」

「うわぁーーー!!」

ズテェン！

「？」

ハッピーは、椅子と共に岩にぶつかり、ようやく止まることが出来た。

「あうぅ…」

「何してますの？ハッピー」

そして、ハッピーの頭についてたキノコもきれいに取れた。

「あ！」

「おまえ、キノコ取れたぞぉ！」

「そんな事より、どーして誰も止めてくれなかったんだよ!!ヒドイよ

ナツ!!どーしてぇ!!?」
「はぁ？」
「遊んでたんじゃねぇのか？」
「つーかなんで椅子と遊んでたんだ？」
「はぁぁぁぁぁ…」
「しかし、まいったな、こう不味くてはいくら空腹でも」
「元々化け物食おうってんだからなぁ」
「普通食おうとはしねぇわな」
「んあーくそぉ、食えねぇって分かったら本気で腹減ってきたぁ」
（最悪だ…友情も仲間もへったくれも無いもんだよ）
ハッピーがショックを受けていると、また後ろから先程の化け物が現れる。
「うわぁー!!」
「危ない!!」
ナツは、ハッピーを守ろうとモンスターに殴りかかる。
「ナツぅ!!」
気が付けば、先程のモンスターが復活し、リート達を囲んでいた。
「不味いやつらめぇ」
「腹の立つ」
「食えもしねぇし、ウザってぇし…」
「まとめてぶっ飛ばしてやる!!火竜の翼激!!」
ナツが攻撃を始めると、それに続いて、リート、グレイ、エルザもモンスターを攻撃していく。
「氷竜の硬拳!!」
「アイスウォール!!」
「はぁぁぁ!!」
「アタシも!!」
ルーシィは、鍵から星霊を呼び出した。
「開け！金牛宮の扉!!タウロス!!」

「ＭＯＯＯＯ!!!」
「相変わらずナイスバディですなぁ」
「あーい、あとよろしく」
　そしてナツ達は、モンスターを攻撃して、バラバラにしていくのだが、
「きりがねぇぜ」
　モンスターは何度倒しても復活してきた。
　すると、今度は地響きが起こった。
「こ…今度は何？」
　すると、モンスターのいる地面がまた光だし、魔方陣が発動した。
「魔方陣!?」
「なんだこれ!!?」
「嫌な予感その２!!」
「もう、いい加減にしてほしいですわぁ!!!」
「うわぁー綺麗！」
　ハッピーだけ、何故か喜んでいた。
「そーじゃないでしょ!!あんたのツボってさっきからどーなってんのよぉ!!」
「これは…」
　魔方陣が発動すると、モンスターが、地面に呑み込まれていく。
「!?逃げろ!!」
　エルザの掛け声も全員が反応する頃には、モンスターと一緒に地面に呑み込まれ始めた後だった。
「「「「うわぁぁぁぁ!!」」」」

　その後、リート達はまたマグノリアへと歩いて帰っていた。
「あぁー腹減ったー…まじで」
「オイラもう歩けないよぉ」
「だから、自慢げに羽を使うな羽を」
「…何かワケわかんない」

「とにかく早く帰りたいですわ…」

先頭で歩く五人の後ろで、マカロフとリートとエルザが話しをしていた。

「マスター」

「あーん？」

「先程の説明では納得がいきません」

「オレもだ、できればちゃんとした説明が欲しいんだけどマスター」

「？」

実は、ナツ達が地面に呑まれた後、魔方陣は自然消滅し、ナツや、それに村に住んでいたと思われる闇ギルドの連中も外に放り出されていたのだ。

「お前ら、何やってたんだよ？」

闇ギルドの一人が説明を始める。

「魔方陣を作ったが、化け物が現れて…みんな…奴等にテイクオーバーされちまって」

「では、お前達は…あの化け物の中に？」

「ゲェ…アタシちょっと食べちゃったぁ…」

「よそ者のあんた達が入って、魔方陣が刺激されて動いたんだ」

「もう、あの魔方陣が動くことはない!!」

マカロフが全てを見透かしたように、そう言うと全員が驚いた表情をする。

「なんでだよじっちゃん」

「細かい事はどーでもよろしい！とにかく、テイクオーバーが解けただけでも、ありがたいと思うことじゃ、これに懲り二度と妙な真似をせんと誓うなら、評議会への報告は無しにしてやる。どーじゃ?!!」

闇ギルドの一人が代表で返事をする。

「あんなおっかねぇ目に合うのはもうごめんだ!!すみません」

「二度としません」

「んにっ！」

そして、時は戻り、エルザとリートがマカロフに続けて話す。
「化け物がやられ、魔方陣のスイッチが入り、全てを消去しようとした」
「でも、マスターは…あの一瞬で化け物達を消し闇ギルドのテイクオーバーを解いて、魔方陣そのものを消滅させた…違うか？マスター」
「はっての～？はぁ、それにしても…」
「「「腹減ったーーー!!!!」」」

# ガルナ島編後
# オレがオマエでオマエがオレで

ガルナ島から、ナツ、ルーシィ、ハッピー、グレイを連れて帰ってきたリートとエルザとラリカは、ギルドの門を開けた。
「ただいまぁ」
「ただいま戻りましたわ」
リートとラリカは、肩を落とすナツ達を他所に、いつも通りの挨拶をする。
「マスター！マスターは居られるか!!」
エルザは、早速指示を仰ごうとマカロフを探す。
「お帰りなさい、島はどうだった？ちょっとは海で泳げたりした？」
帰ってきたリート達を、ミラが出迎える。
「いや、それどころじゃなかったんだけどな…」
「ちょっとミラさーん…空気呼んで空気」
エルザは、未だマカロフを探している。
「マスターは!!?」
「評議会のなんたら会合とかなんたらがあるとかで、昨日から出掛けてるぜ」
マカオがそう説明すると、ナツ達はホッと息をつく。
「ってか…なんたらばっかりでさっぱり分かんねぇぞマカオ」
「しょうがねぇーだろ！思い出せねぇんだから」

「とにかく！今ん所セーフ!!」
「よしっ！じーさんが帰ってくるまで、アレはねーな」
「よかったよ～オイラ達まだしばらく地獄を見なくてすむよ～」
ナツ、グレイ、ハッピーはマカロフが居なくて安心する。
「だからアレってなんなのよー!!あー気になる!!あー怖い!!実態が分からないだけに尚更怖いー!!」
ルーシィは、とことんアレに怯えていた。

「アレねぇ…やるとしても随分久々だな」
「最後にやったのは、初めてナツが喧嘩で建物を崩壊させたとき以来だった気がしますわ」
「あー、あったあった！マスターが今後の為にも本来よりきつめのお仕置きを、とか何とか言って実行したんだっけか」
　リートとラリカが昔の事を思い出していると、ナツの顔色がまた悪くなる。
「おい止めろ！じっちゃんが帰って来るまで安心してたのに、思い出しちまったじゃねぇか!!」
「自業自得ですわよ、私達に当たらないで下さいまし」
「そーだぞぉ、マスターが帰ってくるまでに腹括っとけよ」
「静かにしていろ!!」
「「「ひぃぃぃ！」」」
　リートとラリカ以外は、エルザの睨みに怯えていた。
「マスターはいつ戻られるんだ?!」
「うーん、多分そろそろだと思うけど」
　エルザは、ナツ達の方へと振り返り今後について話し始めた。
「マスターが帰ってきたらすぐに判断を仰ぐ、S級クエストに手を出した罪は罪！心の準備をしておけ」
「「「ひぃぃぃ！」」」
「だからどーいう心の準備をすればいいのよぉ!!!」
「じゃ、オレはかき氷でも食べて待つとしますかね」
「私はハーブティーが飲みたい気分ですわ」
「呑気すぎるでしょアンタ達!!!」
「仕事から帰ったら必ずかき氷！このルーティーンだけは絶対に譲れねぇ！そもそも、お前らを連れて帰る前にかき氷一回食いそこねてんだ！意地でもオレはかき氷を食う！第一オレは罰を受ける側じゃねぇ」
「どんだけ食い意地張ってんのよ!!?」
「私はアレをされるあなた達を見ながら優雅にハーブティーを楽しみたいだけですわ」

「ドＳ過ぎる!?だからアレってなんなのよぉーーー!!!」
「フフッ、すぐに用意するわね」
　ミラが、カウンターからかき氷機とお茶っ葉を取り出し準備を始めた。
「はい、お待たせ♪」
「おぉー、いっただきまーす！」
　シャクシャク
「ありがたくいただきますわ、ミラ」

「それにしてもよぉ、ナツとグレイはともかく、ルーシィちゃんがあんな目にあっちゃうのかぁ、気の毒になぁ」
　一緒に話を聞いていたワカバが、ルーシィを哀れみの目で見る。
「気の毒って…？」
「ワカバてめぇ!!ともかくってなんだともかくって!!」
「そうだ、しかもナツと一緒にするんじゃねぇ!!!」
　ナツとグレイの二人は、ワカバを巻き込んで喧嘩する。
「アレをされるってのに結構元気じゃねぇか」
「ちょっとつまらないですわね。ナツ、グレイ、もっと暗い顔してお待ちなさいな、その方がハーブティーもより美味しくなる気がしますわ」
「「ふざけんな!!」」
「漢には責任の取り方ってもんがある、見せてもらうぜ、テメェらの漢をな」
「ずるいよぉオイラは何でそのともかくってのに入ってないんだよぉ」
　エルフマンやハッピー達も、最早言いたい放題だ。
「だから、あんな目って何ーー!!?」

　その後マカロフを待っているのが暇になったのか、ナツがリクエストボードの前に行くと、見たこともない奇妙な依頼書に目がとまっ

た。
「お？何か変な依頼書があるぞ」
「あ？んだ？」
「ホントだ、なんだこれ？」
グレイとリートもその依頼書に目が止まり、無意識に気にかけてしまう。
そこへ、ナンパから戻ってきたロキがナツ達の下へやってくる。
「あぁ、ナツおかえり」
「おうロキ！えっと…この文字の」
「なに？」
ナツ達が気になったのか、ルーシィもやって来た。
「!?ルーシィも帰ってたのかーー!!?」
「当たり前でしょ？ナツ達と一緒に行ってたんだから、何でそこまでビビるの？」
「い…いや、じゃあ！」
ロキがルーシィから逃げようとしていると、こちらに向かってくるエルザと衝突した。
「おまえ達、今はそれどころではないだろう」
「オマエとぶつかったロキもそれどころじゃなさそうだぞ？」
ナツは、不用意に依頼書の文を声に出して読み始めた。
「この文字の意味を解いて下さい。解けたら５０万Ｊ差し上げます」
「５０万Ｊですって!?リートこれは解くしかありませんわよ!!!」
「おまえ露骨すぎだ…」
「文字の意味を解け？珍しい依頼だな」
リートが解いて欲しいと書いてある文字を見ると、それは古代文字の一種で書かれていた。
「これ、古代文字じゃねぇか、こんなの誰が読めんだよ」
「私は無理ですわよ！」
「胸張って威張るな…」
「でも、隣に現代語訳があるよ？」
「ですけど、そのまま読んでもさっぱりですわ」

エルザ以外は、依頼書に興味心身だった。
「だから、止めろと言っている」
「おぉー！でも、こっちは読めるぞ…ナニナニ？」
ナツは、現代語訳を口に出して読み出した。
「ウゴテル　ラスチ　ボロカニア…だぁー！全然わかんねぇー!!」
ビカァ！
「ん？」
不用意に依頼書を読んだ、ナツの体が光出した。
そして、それは近くにいたリート達も巻き込んでいく。
光が収まると、いきなりグレイが寒がり出した。
「さ…寒い…」
「あ？氷使いが何で寒いんだよ」
「ううう…ナニコレ？体の中が異常に寒いぃ」
次に動き出したのは、ルーシィだった。
「!?なんか、重てぇ…なんか胸の辺りが非常に重てぇ!!こ…腰にくるぅ」
「どーしたルーシィ？声のトーンがやけに低いぞ」
「？そんな事な…えぇーーー!!!」
グレイが隣にいるルーシィを見て、大声で驚き始めた。
「！アレ？何で倒れてたんだっけ？」
グレイが騒いでいるとロキが目を覚まして立ち上がるが、そちらもどうも様子がおかしい。
「フッ、ていうか僕はなんで立ってるんだ？」
ナツの口調もいつもと変わっており、ナツがふとルーシィの方を見るといきなり怯えて逃げ出した。
「うわぁー！」
「おいナツ、何でオレの顔見て逃げ…はっ？なんだこの声？」
ルーシィが、自分の声に違和感を感じる。
「なんかいつもとパターンが違うな」
「何を慌てていますの？」

「「「!?」」」
全員が驚いた表情で声がした方へ振り向くと、お嬢様口調になっていたリートが話していた。
「お…おいリートどうした?オマエ…オカマみてぇに」
「誰がオカマだコラ」
「「「!?」」」
また別の方から声が聞こえそちらを振り向くと、ラリカがマカオを睨み付けていた。
「ラリカ?」
「は?…」
ラリカが自分の体を見て、急激に顔色を悪くさせる。
「な…な…ななななんじゃこりゃあぁぁぁ!!!」
「肉球!?茶色の毛!?オレの体に見たことねぇもんがある!!?ナニコレこわっ!!!」

「一体何を騒いでいる!」
「?」
リート達が騒いでいるのを見ていたマカオ達だったが、振り返るとそこには、キリッと姿勢を正したハッピーが立っていた。
「わぁー、ナツ見て見て…アレ?ナツは?」
エルザがナツを探していると、ロキが返事をした。
「あぁ?何だよ?つーか視界暗ぇ〜」
「オイラの胸に格好いいおっぱいが2つついてるよ。ほら」
エルザが、自分の胸を寄せてロキに見せる。
おーーー!
「な!?やめんかー!!」
ゴチーーン!
「あんまり痛くないよ?」
ハッピーが、エルザに向かってキックするが、即座に鎧姿になったエルザにダメージはなかった。
「何だこのネコ型体型は…というか、これはネコそのモノだ…私は換

装した覚えなんかないぞ」

「これ何がどーなってんの!?何かとっても寒いぃ!!それにどーしてここに私のそっくりさんが居るのよぉ!!」

「つーか何でオレはネコになってんだ!?!!そんな魔法は覚えてねぇよ!!?」

「なんだか私も寒くなってきましたわ…というか、目線がやけに高くなりましたわね」

「鈍感すぎじゃね!?」

「まだ気付かんのか！私たちの心と体が、入れ替わっている!!」

「「「「「えぇーーーー!!?」」」」」

「どーいうことだハッピー!!」

ロキ（ナツ）が目線をハッピー（エルザ）の位置まで合わせて話しかける。

「私はエルザだ!!」

「あぁ？」

「ハッピーはオイラだよぉ！ロキひどいよぉ」

エルザ（ハッピー）が、自分を主張する。

「あぁーうるさい」

「ってことは…」

ハッピー（エルザ）が、誰と誰が入れ替わったかを説明する。

「ナツとロキ、リートとラリカ、グレイとルーシィ、そしてあろうことか、私とハッピーが入れ替わったのだ!!」

えーーーー!!!!

「何であろうことかなんだよぉ」

「古代ウンペラー語の言語魔法…チェンジリングが発動したんじゃ」

そこへ、ようやく帰ってきたマカロフがリート達の下へやってくる。

「マスター！」

「じっちゃん！」

「あの依頼書が原因じゃ。ある呪文を読み上げると、その周囲に居た

人々の人格が入れ替わってしまう。これぞ、チェンジリングじゃ」
「チェンジリング!?」
　ルーシィ（グレイ）は、ロキ（ナツ）の肩に手を置く。
「オマエ、ナツなんだよな？」
「ああ」
「テメェ!!何てことしやがった!!!」
「知るか!!依頼書ちょっと読んでみただけだろーが!!!」
「つーか目の前暗ぇんだよ」
「サングラス取れや!!!」
「止めんかルーシィ…いや、グレイ…この呪文で入れ替わるのは人格だけではない」
　ラリカ（リート）が、真っ先に察した顔をした。
「人格だけじゃないって…まさか…」
「そう、魔法も入れ替わるのじゃ」
　はぁーーー!?
　そして、その頃ナツと入れ替わっていると気がついてないロキは、外を歩き回っていた。
「はぁ…はぁ…暑い、まるで腹の中にマグマがあるみたいだ」
　そして、女性を見かけたナツ（ロキ）は、即座にナンパを始める。
「やぁ！その内どっかでディナーでも一緒にどーだい？」
「「キャー!!!!」」
　ナツ（ロキ）の顔を見た女性達は、悲鳴を上げて逃げ出した。
「？」
　気づけば、ナツ（ロキ）の口からは、ヨダレのように炎が出ていた。
「だぁー！ぎゃぁぁぁ!!!何だコレはーー!!!」
　そして、場所は戻り妖精の尻尾ギルドで、マカロフから最後の説明を受けていた。
「最後にもう1つ、チェンジリングは発動してから30分以内に呪文を解除しないと…未来永劫元に戻る事はない…という言い伝えがある」
　!?

「ななな…あれから、何分たった!!?」
　ミラは、時間を淡々と答える。
「16分、あと14分ね」
「半分過ぎてんじゃねぇか!!」
「じっちゃん！元に戻す魔法は!!?」
「うーん、何せ古代魔法じゃからのぅ…そんな昔の事はワシはよぅ…知らん!!」
「「「「あぁーーーー…」」」」
「S級クエスト破りのお仕置きを楽しみにしてたんじゃがのぅ、コレではどーにもならんわい!!ま、精々頑張ることじゃ」
　リート達入れ替わり組は、ボーゼンとするしかなかった。
「何てこった!!えーいこうなったら!!」
　ルーシィ（グレイ）が着ている服に手をかけて、服をぬごうとする。
「いやーー!!ちょっと、それだけは止めて!!」
「レディが人前で脱ぐんじゃありませんわよ!!」
　グレイ（ルーシィ）とリート（ラリカ）が必死にルーシィ（グレイ）を押さえる。
「そうか、中身はグレイだから、脱ぎ癖もそのまんまなんだね」
「もう、オレとしてはそれどころじゃねぇよ…下手すりゃ一生このままラリカとして生きていかなきゃなんねぇのかも知れねぇのに…」
　ラリカ（リート）の顔色は、とことん悪くなっていた。
「あ！そうか！」
「ハッピー!?何を!?」
　ハッピー（エルザ）は、エルザ（ハッピー）が何か行動を起こそうとしていることに気付き、止めようとする。
「面白そうだな、やってみようっと」
「うわー!!や…止めろ！」
「換装！換装！オイラも換装！うわーい!!」
　エルザ（ハッピー）がいきなり換装をし始め、ツインテールのスク水姿に釣り竿を持つという、ツッコミ所満載の姿に換装する。
「どじゃーん!!」

その姿に、男ども数人が興奮する。
「「おぉー！これはこれで」」
「いや、何でいきなりあんな姿に換装してんだよアイツ…」
「やめんかーーー!!!」
ゴン!!
「あ…」
ハッピー（エルザ）が殴ろうとすると、今度はエルザ（ハッピー）の無意識に出された肘に顔面をぶつけてしまう。
「なんということだ…S級魔導士としてのプライドがぁ」
「じゃあ、どうしてあの水着を買いましたの？」
「もうあの水着見せた時点でプライドもへったくれもねぇな…」
「あれぇ？おかしいなぁ、格好いい鎧にするつもりだったのに」
「分かった！確かに魔法も入れかわっちまうが、中途半端になっちまうんだ!!」
「おいロキ…じゃなかった。中の奴」
「中の奴とか言うな!!何だよ？」
「オマエの魔法はどーなってんだ？」
ワカバにそう聞かれたロキ（ナツ）は、渋い顔で答える。
「わ…わかんねぇ…なんも感じねぇし何もおきねぇ…つーか何かモヤモヤしてるだけだ」
「あ？」
「何だこのムズムズする感じはーーーー!!!」
ギルドで騒いでいると、慌ててナツ（ロキ）が走って戻ってきた。
「誰かーー！なんとかしてくれーー!!!」
「何だその炎」
「つーかヨダレだな」
「下品ですわね」
そう言うリート（ラリカ）の口からは冷気がだだ漏れしていた。
「お前も人の事言えねぇぞ」
「止まらないんですのよ!!!」
「確かに、すごく中途半端ね」

ハッピー（エルザ）は、翼を出して空中を飛んでみていた。
「おぉー成る程、空を飛ぶとはこういう感じか…ナドト感心してる場合ではない!!!もう時間がないぞ!!!」
「一体どーしたら…はぁ」
ため息を吐くグレイ（ルーシィ）の口からは、氷が垂れ流されていた。
「グレイ…じゃなかった。ルーシィ、口から氷が…」
「!?キモい!もうやだぁ…」

「ルーちゃん!私に任せて!」
「!」
慌ただしくなったギルドに、仕事から帰ってきたレビィが声をかける。
「レビィちゃん!」
「レビィ…」

「オレたちチームシャドウギアが戻ってきたからには、必ず元に戻してやるぜ!!」
「あぁ!という訳で」
「「頼むぜレビィ」」
ジェットとドロイは一歩後ろに下がり、レビィを先頭にだす。
「お前らはなにもしねぇのかよ」
「こーいうのはレビィの専門だ」」
「胸張って言うことか!!!」

「ありがとう!レビィちゃん」
「ルーちゃんの為だもん!頑張る」
そして、レビィは小声でグレイ（ルーシィ）に耳打ちする。
「ルーちゃんの書いた小説、絶対読者第一号になりたいから」
「んで!どーすんだ!?」
レビィは依頼書を見て、解読を始める。

「私、古代文字にちょっと詳しいから、だからまずは、その依頼書の文字を調べてみる」
「時間がねぇ！間に合うのか？」
「とにかく！この場はレビィに任せよう！」
　魚を加えたハッピー（エルザ）がそう言うが、加えている魚のせいで、頭に入ってこない。
「!?…なぜ私が魚を……」
「おいしいよ？」
　レビィは風読みの眼鏡で、依頼書の文字に関連している書物を次々と読みあさっていく。
「あと、１０分くらいしかないぞ!!」
「というか、レビィはその文字を読んでも平気ですの？」
　リート（ラリカ）が、ふと思った事を聞いてみる。
「こーゆー古代の魔法はそのまま読み上げなければ大丈夫なの」
「時間がねぇ～！あぁー！モヤモヤするぅ、もうずっとこのままだったらやべぇぞぉ!!」
「元凶が言ってくれんじゃねぇか、え？ナツ」
　ラリカ（リート）は、ロキ（ナツ）を睨み付けながら指をゴキゴキと鳴らす。
「お…おおお落ち着けよラリカ!!」
「オレはリートだ!!」
「でも、オイラは気に入ってるよ、もっといい鎧にかんＳ「だからやめんか!!」」
　もう一度換装をしようとするエルザ（ハッピー）を、ハッピー（エルザ）が止める。
　そして、レビィは読んでいた本をパタリと閉じた。
「どう？レビィちゃん」
「何かわかったか!?」
「うん…わかんない」
「「「「えぇーーーー!!!」」」」
　入れ替わった全員が、ショックで声を上げる。

「そうか…私はこれから先…妙な羽の生えた猫として生きていくのか…」
「オレは今後空を飛ぶしかできないのか…はぁ」
　ハッピー（エルザ）とラリカ（リート）は、絶望に打ちひしがれていた。
「オイラは妙じゃないよぉ！」
「私は空を飛ぶ意外にもちゃんと出来ることはありますわよ!!」
「…えーーい!!!」
　またも、ルーシィ（グレイ）が服を脱ぎ出そうとし始め、グレイ（ルーシィ）が必死に止める。
「だからやめてよぉ!!!」

「だぁー!!モヤモヤするぅ!!」
「僕はもう二度とデート出来ないのか…」

「ちょっ…落ち着いて！もっともっと考えるから!!」
　レビィは、必死に解決法を探す。
「マカオ!!時間は!?」
「あと8分…そろそろ腹括った方がいいかもな」
「ジョーダンじゃねぇ!!意地でも元に戻ってやる!!」
　レビィの後ろでは、ドロイとジェットが応援団の格好で必死に応援する。
「フレー！フレー！レ・ビ・ィ！」
「アイツらただの応援要員かよ」
「テメェら!!それがレビィの邪魔になってオレたちが元に戻らなかったらぶっ飛ばすからな!!」
　ラリカ（リート）は、かなり焦っているのか、どんどんと言葉使いが荒くなる。
　しかし、何も出来ないリート達は、ただ黙ってレビィの解読が終わるのを待つしか出来なかった。
「もし、ずっとこのままだったらどーする？」

ふと、ルーシィ（グレイ）は、思った事をみんなに聞いてみた。
「あぁ？どーって、何が？」
「この先、この状態のまま仕事に行く気かよ？」
「そりぁ、元に戻らなかったらそーするしかねぇだろ」
「それはマズイよな…やっぱり…」
ラリカ（リート）も、同じ事を考えていたらしく、もし元に戻らなかったらどーなっているか想像する。
「あ…」
グレイ（ルーシィ）が声を出し、皆の注目を集める。
「どーした？グレイ…ではなくルーシィ」
「これ大変よ！だって今のアタシ達、皆魔法まで入れ替わって中途半端になっているでしょ？そんなんで仕事に行って上手くいきっこないもん！」
「ってことは…」
「今の…」
「私達は…」
「まぁ…間違いなく…」
「「「「「妖精の尻尾最弱のチーム!!?」」」」」
「かっこわる」
ロキ（ナツ）とハッピー（エルザ）は、ようやく事の重大さを理解し、先ほど以上に焦りを感じる。
「ヤバイ!!!確かにそう言われれば、かなりヤバイ!!!」
「なぜ今までそんな単純な事に気づかなかったのだぁ!!やはりネコになってしまったせいかぁ…」
「でも、オレはとっくに気づいてたぞ？」
「ハッピーと私の知能は違いますのよ！当然ですわ」
「ひどいよぉ！リート…じゃなくてラリカも入れ替わってからのエルザもいちいちトゲがあるよぉ！」
エルザ（ハッピー）は、飛び上がりハッピー（エルザ）の上にのしかかる。
「うわぁー!!」

「今何しようとしたんだ？エルザ…じゃなくてハッピー」
「ひどいこと言われたから…オイラこんなとこ出てってやるぅって飛んでいこうとしたんだ…そしたら羽がなくて、羽がなくて転んじゃったんだ」
「わ…私が悪かったから…どいて…く…れ……」
　エルザ（ハッピー）の重さに耐えきれなくなったハッピー（エルザ）が、耐えきれずに白目を向いてしまう。
「わかった!!」
　レビィが叫ぶと、入れ替わり組の全員がレビィへと視線が向く。
「「「「「おぉーー!!」」」」」
「おっしゃ！魔法が解けるんだな!!」
「どーすれば解けるんだ？」
「この古代文字はね、ここに永遠の入れ替わりをもって幸せをもたらすって意味なの」
「やったー！レビィちゃんすご！」
「ここに…永遠の入れ替わりをもって幸せをもたらす」
「なぁ…今のオレにはそれが不吉な言葉にしか聞こえねぇんだが…オレの思い過ごしだよな？…な？」
「そんで!?」
「つまり！この魔法で入れ替わった人達が永遠に幸せに暮らせますって意味なの!!はぁ～解けてよかった～」
　レビィの言った意味を理解した者達は、ショックを受ける。
「ちょっと待てぇ!!!」
「それじゃオレたちに一生このままでいろって意味じゃねぇか!!!」
「肝心の戻し方が分かってねぇじゃねぇか!!!何やってんだオメェは!!!」
「あ、ホントだ!!どーしよー」
「無自覚でしたの!!?」
「レビィちゃん、魔法が解けなきゃダメなのよ。きっと何か方法があるはずよ。裏の意味とか…そーいうやつ、そっちを重点的に調べてみて」

グレイ（ルーシィ）のアドバイスで、レビィはやる気を更に出す。
「うん！頑張る！」
そして、レビィはまた解読を始め、その後ろでは先程同様に、ジェットコースターとドロイが応援し始めた。
「フレー！フレー！レ・ビ・ィ」
「あの応援チームかえってウザくねぇか？」
「オレもそう思う…スポーツとかならともかく、解読に応援は絶対に邪魔だろ」
「暑苦しいですわね」
「いや、気合いが入っていいと思うぞ！オレも参加してぇぐらいだ」
「「えぇ～」」
応援団に呆れていたワカバ、リート、ラリカと、逆に賛成派のエルフマンに、ワカバ達は少し引いていた。
「ちがう…こうじゃない…こうしたら、余計分かんなくなった。これじゃあ言葉になってない、うーん」
そうこうしてる間にも、時間はどんどんと過ぎていく。
「あと3分」
「いやぁぁぁ!!」
「魚なのか…これから、朝も、昼も、夜も…魚なのか!!猫じゃらしを見ると嬉しくなってしまったりするのか!!」
ハッピー（エルザ）は、そう言って肩を落とす。
そこに、エルザ（ハッピー）が仲直りをしようとやって来た。
「エルザ、さっきはごめんね。オイラが悪かったよ」
「ハッピー…おまえ！」
「喧嘩なんかしてる場合じゃないもんね。仲直りしよ」
「そうだな、私も悪かった」
「あい！これ仲直りの印だよ」
エルザ（ハッピー）は、生の魚を取り出して手渡した。
「サカナー！って…」
「うわぁぁぁ!!」
ハッピー（エルザ）は、泣きながら翼で飛んでいった。

「空気を読みなさいよぉ!!」
「レビィ!!まだか!!?」
「こりゃマジでヤベェ！一分切ったー!!」
「テメェ、何かさっきから楽しんでねぇか?!!あぁん？」
「こっちは必死なんだぞコノヤロウ!!」
　ロキ（ナツ）とラリカ（リート）の二人が、カウントダウンをするマカオに逆ギレする。
「そ…そんな事ないって…」

「もうちょっと、なんとなく分かりそうな気はしてきてるんだけど…」
　いつの間にか、レビィの後ろの応援団にエルフマンが加わり、２人から3人へとなっていた。
「頑張れ！頑張れ！レビィ！くぅ～燃えるぅ!!」
「アイツ似合いすぎだ…」
「暑苦しさも3割増しくらいになってますわよ…」

「おや？まーだやっとるのか？」
　ギルドの奥にいたマカロフが、様子を見に戻ってきた。
「マスター!!何とかできねぇか!!?このままじゃ一生オレたち入れ替わったままだぞ!!」
「！」
　マカロフは、何か思い出したような顔をする。
「何か思い出したか!?」
「そー言われてもねぇ」
「はっ倒していいですの!?この人はっ倒していいですの!?」
「落ち着けラリカ、マスターをはっ倒しても何も解決しねぇから…」
「どれだけ正確かは知らねぇけど、多分あと４０秒!!」
「ヤバイ!!このままネコとして過ごすのは絶対に嫌だ!!!」
「リートも何気に失礼ですわね!!?」
「やぁ！1つ思い出したぞ!!」
　何かを思い出したマカロフを、入れ替わり組が囲む。

「何だマスター!!」
「この魔法を解くときは、確か一組ずつだったハズじゃ。一辺に全員を戻すのは無理だったハズじゃ」
「何でそれをもっと早く思い出してくれなかったぁぁぁ!!!」
「忘れとったもんはしょーがないじゃろ」
「あと３０秒…ぐらい」
　そして、誰が最初に戻るかで争いが始まった。
「どのペアが最初だ!!」
　まず、ナツとロキのペアが名乗り出る。
「とーぜんオレとロキだ!!なぁロキ？」
「そうだ」
　次にグレイとルーシィが、
「そーは行かないわ!!最初はアタシ達よ」
　次にリートとラリカが、
「バカ野郎!!初めはオレたちに決まってんじゃねぇか!!」
　そして、エルザとハッピーも、
「待て!!私がずっとこのままだと、妖精の尻尾はどーなる!!最初は私とハッピーが」
「オイラはどっちでもいいよぉ」
「オレたちが!!」
「いーや!!オレたちだ!!」
「私たちだって言ってんでしょ!!」
「私たちだ!!」

「…醜い…」
「人間追い詰められると怖いのねぇ」
　ナツ達のいい争いを見ている、ワカバとミラがそっと呟いた。
「１５秒切ったよぉ～」
「あぁー!!分かったぁ!!」
　そこでようやく、レビィが解読し終える。
「１２、１１」

「レビィちゃん!!」
「こー言うことなの!!つまり、説明するとね」
「説明はいい!!とにかく急いでやってくれ!!時間がねぇんだ!!」
「9、8」
「「オラァ!!」」
　カウントダウンにイラついたロキ（ナツ）と、ラリカ（リート）は、マカオをド突いた。
「ぐぼぁ!!」
「レビィ!!早く!!」
「分かった！いくわよ？」
　そして、レビィは呪文を唱えた。
「アルボロヤ　テツラ　ルビコウ!!　アルボロヤ　テツラ　ルビコウ!!　アルボロヤ　テツラ　ルビコウ!!　アルボロヤ　テツラ　ルビコウ!!」
　レビィが呪文を唱えると、依頼書が光りだしギルド全体を包む。
　光が収まると、ルーシィは自分の体を確認する。
「あ！元にもどった!!」
「オレもだ!!」
　隣にいたグレイも、自分の身体に戻れてホッとする。
「やれやれ…」
　そういうグレイの口からは、氷が落ちていた。
「！」
「元に戻っても出んのかよ」
「レビィちゃん！ありがとう！」
「やったー!!」
　ルーシィは、レビィに抱きついて解読した方法を聞く。
「どーやったの？教えて」
「言葉そのものには意味がなかったの、逆さ読みをやってみたんだ。古代は文字が少なかったから、色んな意味を伝えたい時に、反対から読むと別の効力を発揮するようにしてたの。だから、呪文を逆さから読んでみたら魔法が解けたの」

「そっかーホントありがとね」
「助かったぜ、レビィ」
「ルーちゃんの為だもん！へへっ」
　そして、喜んでいたルーシィとグレイ以外はというと…
「と…解けて（ねぇ）（ない）!!」
「えぇーーー!!!」
「私もだ!!ネコのままだぞ!!」
「オイラはどっちでもいいけどねぇ」
「おい！戻ってないぞ!!どーすんだこれ!!?」
「元に戻ってませんわぁぁ!!」

「わずかの差だなぁ、残り3組は制限時間に間に合わなかったって事だ」
「そそそんなぁ!!どどどどーすりゃいいんだよぉ!!」
「オレたち一緒このままなのか!!?」
「レビィ、もっかいやってくれ!!」
　レビィは依頼書を見て、顔を青ざめさせていく。
「あれ？何か微妙に間違えちゃった…かも」
　えぇ～～～～!!
「じゃあオレたちはずっとこのまま!?」
「悪夢だ!!悪夢以外の何者でもない!!」
「オイラはどっちでもいーけどねぇ～」
「まぁまぁ、他にも何か方法があるじゃろ」
　マカロフ？と思い全員がふりかえると、喋っていたのはなんとミラだった。
「ん？」
「なんだか…私背が縮んでない!?」
　マカロフの体で周章てているミラ…どうやらミラとマカロフが入れ替わったようだ。
「えぇー!?まさかミラさん!!?」
「じーさんとミラが入れ替わってんぞ!!?」

「なんというこのナイスバディ!!ウハハハハ!!」
　ミラ（マカロフ）は、みらと入れ替われて大喜びだが、マカロフ（ミラ）はそうでもないようだ。
「いやぁぁ!!それだけはいや!!」
「もしや…」
　ハッピー（エルザ）は、ギルド全体を見渡した。すると、予想通りにエルフマンとカナ、ドロイとジェットも入れ替わっていた。
「漢は諦めが肝心…あ？なんだこの酒クセェ体は」
「!?ちょっ！何よこれ!!何でアタシがエルフマン!!?うーっ何か急に酔いが覚めてきた」
「おい、ドロイ…!?」
「あ？何だよ？ジェット…!?」
「オレたち入れ替わってんぞぉ!!」
「おまえ達は入れ替わってもさして問題ないじゃろ…それにしても、これはまた夢のようなナイスバディ!!」
　ミラ（マカロフ）が、ミラの体でグラビアの体制を真似する。
「いやぁぁ!!レビィなんとかしてぇ!!」
　もはや入れ替わった者だらけで、ギルドはメチャクチャになっていた。
「もう、私の手にはおえないです…」
　その後、どーにかして元に戻れたかどうかは、誰にもわからないってことで
「元にもどせぇ!!」
「投げっぱなしで終わりかい!!」